



参加者全員で記念撮影

第50回食べ歩き会

室津で海の幸を堪能

食べ歩き会では、いつもわが社(商都交通)の観光バスを... 記念すべき第50回となりました...

ついで帰路につきました。帰路のバス車内では、元宝塚歌劇団員でプロ歌手の小山清美さんにカラオケで歌っていただきました...



俱楽部と校友会大阪府支部共催の新年会は来年(平成28年)1月16日(土)午後1時より、シエラトン都ホテル大阪(近鉄大阪上本町駅、地下鉄谷町9丁目駅下車)で開催します...

倶楽部部室 11月27日移転

倶楽部の部室は、現在、大阪新阪急ホテル3階の一室にありますが、ホテルの耐震補強工事のため、一時、同じ3階フロアの東廊下側「寿の間」に引っ越すことになりました...

大阪早稲田倶楽部 NEWS

士業への道 - 酒井敏行が語る



酒井さん?と思う方は、今年3月の倶楽部NEWS掲載の新年会の記念写真をご覧下さい。最後尾でハンザイして頑張っている、あの青年、酒井敏行さん(平11年人間科学)です...



読売新聞大阪本社(北区)の見学会が8月26日、Wフォーラムの一環として開催されました。小林一則(校友会大阪府支部幹事長(昭55年政経)のご案内)が80代の先輩方まで総勢18名が参加しました...



豊住伸夫(平20年人科)が、見学会となりました。近所の料亭に場所を移して開催された昼食会では、贅沢なお食事を堪能しながら、現場に精通される小林先輩による解説を伺いました...

読売新聞社を見学

Wフォーラム

大阪早稲田倶楽部 早稲田大学校友会大阪府支部

ようこそ倶楽部へ 新人歓迎の集い



倶楽部の新入会員歓迎会が10月13日(火)、大阪新阪急ホテルで開催されました。春と秋の年2回開いており、この日は、新会員22人と既存会員29人が参加しました。

この日は昭和43年卒から今年卒業したばかりのフレッシュな方までが勢ぞろい。お寺の住職さんから東芝の常務関西支社長、東急建設の執行役員大阪支店長、NHK大阪放送局広報部長など多士済々。新卒の中村太さん(平27年文)は梅田芸術劇場の営業部チケット担当で、公演のPRに倶楽部に来られ、入会いただいたものです。グラス片手に歓談が進み、いつもの和やかな宴となりました。

歓迎あいさつで、吉川一三会長(昭45年商)は「倶楽部は様々な活動を行っております。先輩、後輩と楽しく交流をはかってください」と述べました。入会は既存会員からの紹介がこれまで多かったですが、この3年はホームページからの入会が増えています。多い月で10人ほどの入会がある一方で、転勤や体調不良などで退会される方もあり、会員数は増えたり、減ったりで、10月現在で656人。

第3回「学問活用の杜」

民法改正を学ぶ



民法が制定以来、120年ぶりに大幅に改正されます。私たちの暮らしに直結する最も基本的なルールですが、いったいどう変わるのか。「学問活用の杜(もり)」の第3回は9月14日、講師に伊丹香寿美さん(平16年法)と小仲真介さん(平22年大学院法務研)の若手弁護士2人をお招きし、関西文化サロンの開催しました。

50余人が参加。難解な法律をわかりやすく解きほぐしてお話をとのスタンスから、ベテランの弁護士さんでなく、あえて若手を登用。講師も1人が前で淡々としつつでなく、男女ペアで掛け合い風に行進し、司会の森本宏弁護士(昭60年法)が「いっちょ噛みをする楽しい演出となりました」。

借金やつけの時効はどう変わるのか。伊丹さんがスナックのママ、小仲さんが弁護士の役になって、事例研究。そのままママができて伊丹さんの迫真の詰問に小仲さんもたじたじ。

次の事例では、家の壁紙が約束通りに施工されていない契約不適合だとして、小仲さんが弁護士役の伊丹さんに迫った。本番の法廷ではもっと真剣なやり取りとなるのでしょうか、わかりやすくするために笑いを取ろうとの狙いはばっちり。楽しく勉強できたひとときでしたが、はて、民法はどう改正されるのか。終わってからレジュメを読み返す始末でした。

小林一則(昭55年政経)

邦画は今、Wフォーラム こんな風だ



邦画の講演にみな興味津々で耳を傾けました。(前列左から3番目が笹川さん)

Wフォーラム講演会のワセジョ(早稲女)シリーズの第3弾は、7月17日、関西文化サロンに笹川慶子関西大教授(平10年文)を迎えました。当日は、台風11号接近のためあいにく大荒れの空模様。電車の遅れも目立つ状況でしたが、参加予定者ほぼ全員が集まりました。

講演テーマは「日本映画の新しいかたちー邦画ブームとその後」。倶楽部行事には、ほとんどお見えない方が何人もご登場、通例の倶楽部行事とはまた違って「お好きな方々」ならではの雰囲気になりました。

今回は、あえて初学者向けの取り組みやすいテーマでお願いしましたが、お話の内容は、1990年代末から始まった様々なレベルの社会・経済の変化がもたらした映像世界の変化を追及するという深い考察でした。

「洋画の時代」だった90年代、若者達は邦画に振り向きもしませんでした。2002年のバブル崩壊後の邦画シエラはわずか27%、ほぼ壊滅状態だったのです。それが、翌年から上昇、2006年には洋画のシエラを上回るようになったわけですが、それは何故なのか?

理由は色々考えられますが、産業構造の変化が映画産業の変化をもたらし、より強いメディア産業へと再生させたというのが、最も有力です。「制作委員会方式」という新たな制作環境が生まれ、さらに新しいメディア産業が映画の副次的利用を促すようになったこと、少額でも映画を作るコンテンツビジネスが現れ新たな制作の担い手になったこと、シネコンなど和洋一緒の興行方式が登場し、映画を見なかつた層の取り込みにも成功したことなどから、作品そのものの変化が出てきたわけですね。

若者女性に支持された漫画やテレビドラマが映画化される(「花より団子」、いわゆる「セカチユウ」など)、わかりやすいハリウッド的エンターテイメント性、カット数が2000以上もあるデジタル表現(「嫌われ松子の一生」など、若者を意識した映像表現が、若い観衆の心を掴んだのです)。

現在も邦画のシエラは洋画を上回っていますが、その将来は残念ながら懸念されるものがあります。家でDVDを見るといような鑑賞方式の変化とともに、映画館の数そのものが減少しているのです。今回の出席者からも、邦画が流行っているのは、ハリウッドがマンネリ化した結果にすぎないのではと、海外での評価は高いが日本映画として不変的価値があるとはいえない、など色々な意見が提示されました。

しかし、邦画に未来を期待される作品が出てきているのも事実です。複数のクリエイターによる合作が才能の力オスを生む「魔法少女まどか」、小説アニメそれぞれの特性を融合した「四畳半神話大系」など。

講演後の懇親会にも大半の方が参加。心温まる和やかさの中、映画、早稲田の演劇博物館、鳥越信先生についての話題で大いに盛り上がりました。今回、超多忙の中、校友のためにお話いただいた笹川さんに、深く感謝いたします。

豊島恵子(昭52年法)